

「日本人の国民性」調査にみられる高校生の動向

— 国民性の諸様相 —

*The trend of opinion of high school students in the investigation
of the Japanese national character*

— *Aspects of National Character* —

椛 田 信 吾

目 次

まえがき

国民性の諸様相—成人と高校生の比較

§ 1 基本項目

I 個人的態度

§ 2.1 個人的な考え方と社会との関連

- (1) しきたりに従うか
- (2) 反対をおし切って実行
- (3) 幸福感
- (3)b 住所に満足か

§ 2.2 自然や過去・将来に対する態度

§ 2.3 暮らし方と大切なもの

- 1) 暮らし方
- 2) 一番大切なもの

§ 3 宗 教

- 1) 信 仰
- 2) 宗教か科学か
- 3) あの世を信ずるか
- 4) 性善・性悪
○人間らしさ, 心の豊かさ
○立派な人物について

II 社会的態度

§ 4 子 供 ・ 家

§ 4.1 子 供

- 1) 教育上のウソ
- 2) 子供の育て方—金, メンツ, 自由,
規律
1. 金
2. メンツ観

3. 自由か規律か

§ 4.2 家

- 1) 結婚式, 葬式を盛大に
- 2) 本家, 分家, 養子
 1. 本家, 分家を考えるか
 2. 他人の子供を養子にするか
- 3) 先祖を尊ぶか

§ 5 身近な社会—特に義理, 人情について

§ 5.1 義理人情に対する態度

- i) 恩に対する考え
 - 1) 恩人がキトクするとき, 親がキトクの時
 - 2) 入社試験(親戚, 恩人の子)
- ii) 大切な道德に関する考え
- iii) 上役に対する考え
 - 1) 目上の人
 - 2) めんどくさがる課長

§ 6 男・女の差別

§ 6.1 男・女の生まれかわり

§ 6.2 男・女の苦しさ楽しさ

§ 6.3 能 力 差

§ 6.4 女は家庭か世間か

§ 7 一般の社会的問題

- 1) 文明と人間性
- 2) 国家と個人
 1. 家族・国家中心か個人中心か
 2. 日本と個人の幸福
 3. 公益と個人の権利の関係
- 3) 法律に対する考え

§ 8 政治・権威に対する態度

- 1) 権 威 主 義
- 2) 政治・経済上の諸主義
民主主義, 自由主義, 資本主義,
社会主義
- 3) 選挙と支持政党

§ 9 日 本 人 ・ 人 種

- 1) 日本人の長所・短所
- 2) 日本人, 西洋人の残酷
- 3) 日本人, 西洋人の優劣
- 4) すぐれた人種
- 5) すぐれた国
- 6) 日本の立場

あ と が き

ま え が き

この小研究は筆者が関係せる高校の「倫社」研究会で発表したものに基いて、調査結果のデータを加え、検討分析したものである。その会の講師として来られた芸術短大助教授高橋正臣氏のお勧めにより、この方面に関心を持たれる方々により、より広範囲の調査がなされその分析により高校教育の参考になりうるならばと思ひ、敢てのせたものである。

筆者も36年短大設立と共に兼任し、その間研究紀要に研究をのせて頂いておるが、「シュヴァイツァーの倫理思想」(紀要第1巻)、「二宮尊徳の倫理思想」(第2巻)の理想・原理的研究から、高校教育に従事するものとして道徳教育のあり方を問題とする「政治と教育」(第4巻)と転じ、国家百年の大計をたてるための教育はいかにあるべきか、教育政策、各政党の道徳教育論を考究してみた。しかし、日本人としては風土性、歴史性に立脚せるものでなくては実現性に乏しいのではないかと考えられ、ここに和辻哲郎(恩師)、中村元博士の著作を参考としつつ「国民性の考察」(第5, 第6巻)において、「国民性とはなにか、また、それがいかに歴史的に展開し来たったか」を自分なりにとらえようとした。しかし、人倫的重視の傾向(中村元)としての尊皇思想について、和辻先生の著作に疑問を感じつつも、日本国家の起源に遡っての尊皇思想の把握に行き詰まって「その三」は出せない次第である。(紙上であるが江湖の教えを乞うものである。)

その後、教育を国民教育の立場からいかに国民のものたらしめるか、また、民主主義の倫理がいかに教科書の中で扱われているか、「国民教育論における教育権の考察」(第7巻)、「ヒューマニズムとの関連における民主主義の倫理と教育」(第8巻その一、その二)で教育

方法論的な研究を再び試みてきた。

ところで、たまたま統計数理研究所の「第2日本人の国民性」(1)を見出し、現代における日本人の国民性を見出し、現代における日本人の国民性を調査により追求しようとする動きを知った。この研究は昭和28年から43年までの5年毎に4回調査したものである。しかし、そこにも尊皇思想はうかがい知りえないのであるが、かかる研究はこれまた大切なものであると思っていた。そこで高校の研究会でこの全国調査に基いて高校生を対象として調査し、それと比較してみたらと思ひ、ここに鶴見丘、青山、緑丘高の同じ別府市内の3高校生女子百名、男子百名を対象としたのであるが、3人の先生の力では結局1学級ずつ、男子50名、女子2学級80名 計130名にしか調査しえなかった次第である。だからこの調査は一地域の高校2年生に限られ全国的たりえないので、「高校生の動向」とはいきれないものであるが、現状致し方がないと思ひ、前述の如く広範囲の調査を願う気持もあり、ここにのせるのである。

尚、国民性の考察の見地からこの統計数理研究所の全国調査(以下「全」で表わす)における分析概要を参考にしつつ、それとの関連において高校生の動向も探ってみた。ここでは「全」と同じ項目、符号とした。しかし高校生にそれ程必要でないと思われるものは、調査時間(授業時1時間以内)の制約もあり省略した。それは処理や発表に手間どり期日の都合からでもあった。幸に48年(1973)は研究所の第5回の調査の年であり、出来たら高校生も対象とされることにより、高校教育の資料に出来たらと念願する次第である。また「国民性の考察」も官学一体というか、産学協同の総合的研究、運営の下に「国民的統合のための国民的当為」(和辻哲郎)確立にあたられたらとひそかに念願するものである。

国民性の諸様相 — 成人と高校生の比較

§ 1 基本項目(所属学校名, 類型, 性別等)

「全」では男49%, 女51%であるが、高校2年生(以下生徒で表わす)は男子50名38.5%, 女子80名61.5とクラスの編成上いくらか女子が多くなったが「男・女差別」を除き、男女の別を一々考える大きい差は少なかったのですべての項目については分けて考えなかった。

I 個人的態度

§ 2. 1 個人的な考え方と社会との関連

(1) 「しきたりに従うか」については「全」の成人では「従がえ」が35%に対し、生徒ではわずか1%しかない。そして「自分が正しいと思えば、世のしきたりに反してもおし通すべき」が「全」の40%(15年間4回とも

ほとんど変らず) (2) に対し14%となる。かく「全」では「自己主張」40%と「従う」35%と両者は接近しており、「世間の身近なしきたりというものは、古くて、悪いもの、あるいは消極的なイメージで一般の人がそれほど受けとっておらず、現実の生きている社会に対するとき、自分の考えが正しいと思えばそれを取り、しきたりの方が無難と思えばそれをとるという簡単には変わらない傾向が読みとられる」(3) し、「『正しいと思うことはおし通し、実行すべき』か否か、という点で意見が分かれたままであり、15年間に意見が変化しただの多いのに、変化しなかった意見、(第4次と第1次の差が5%以下のもの)」(4) の1つである。

そして、また「しきたり」に「従う」という意見が「日本人らしい意見だと世間一般で考えられているらしいもの」(5) とされ、また、1965年の予想調査で「一般の日本人が、こういう答が多いだろうという予想(6) であるのに、生徒は「従え」が1%というの「合理性をみる意見」(7) としての「おし通せ」、「個人主義的意見」としての「おし通せ」があげられており、そして、それは「学歴による差がもっとも著しく、また、中・高で適度に個人主義的傾向がでている」ものといえよう。しかし生徒の「従え」1%は成人の20歳台前半の26(成人平均35)%に比してもあまりに少なく、また、「おし通せ」も同じく48(成人平均40)%に比し14%というのは20歳台前半と年齢の差はあまりないのに大きく開きがみられる。学歴別でも同じである。そして「場合による」が84%と成人の20%と大きく開く。成人の意見がほぼ2等分して変らない意見の少ない例とされているのに「合理的」「個人主義的」意見への傾向はみられるとしても、猶極めて少ないのはどうしてであろうか。ただし生徒は既成のものに対しては20歳台前半以上に批判的あるいは拒否的にみえる割に、自己を強く主張しきれない不安や「しきたり」について身近に感じえず理解不十分のためから「場合による」と態度を保留させておるものといえる。

ここに「しきたり」や「伝統」の尊重が教えらるべきではなかろうか。もちろん全国調査でも意見は年齢や時代と共に変わるものが多いとのべているが、それにしてもこの回答率からは「場合による」が多すぎるし、学習に専念するあまりからの無関心、無理解からとすると不安、危惧の念を覚えるものである。

(2) 「反対をおし切って実行」

ところが、この項目については「全」といづれの回答もほぼ同じである。そして、ここで「自分が正しいと思えば他の人の反対をおし切っても実行する」という意見59% (「全」59%、緑丘高女子のみ68%) は日本人の多

数意見(階層によるゆがみのない多数意見) 20項目中の1つであり、それは「積極性という大げさすぎるが、けっして消極的ではない面」(8) とされるものである。そして「反対をおし切って実行するは年齢の若い者ほど高く(20歳台前半70%)、学歴の高い層ほど高い(中学60、高校63、大学65)」(9) とされ、年齢と世代の関連からみて「年齢差が増大し、意見の差が大きくなったもの」(10) 6項目中の1つとされておるものであるが、ここでは中学生並、40歳台前半並の59%である。若くて、成人の平均よりはいくらか学歴が高いからといって上記の傾向から少し外れているということになる。緑丘高の女生徒のみが20歳台前半、大学卒並ということになる。地域的には関東63%、6大都市63%(11) 並である。どうしての違いであろうか。

(3) 幸福感

については「ひとくちでいうと、あなたは幸福だと思いますか」に対して、「全」が82%「幸福だ」というのに対し、70%と幾分下回る。しかし、緑丘高(女子音楽科)のみでは85%となり、青山高(女子、普通高校)鶴見丘高(男子、同)は進学不安、苦痛からか、幾分「不幸」「他」「分らない」(D、K)とするものが多い。これは進路がはっきりしている、いないことからの安心、不安からの違いといえよう。また、「全」の82%もそれが1953年のものであるから、これも現在調査したとすると、マス・コミの調査以上に公害、物価高を反映して多少下回り、高校生のと同じ位にさがるかと思われる。

(3), d 「住所に満足か」

については、「全」と生徒では「満足とするもの」「全」の75%に対し、45%と大きく違っておる。それは、これから成人し、外に出る者の気持からであろうし、また、別府の環境のせいであろうか。しかし、大体のところ多少とも青雲の志を抱き異郷に学ばんとする青年の気持といえよう。だから、ずっと住むのではなく、現在修学途上にある者として、「時により満足」とするものが「全」の7%に対し36%となっており、この辺の事情の違いからといえよう。

しかし、自分の市(町・村)に住んでいることに満足できるようにする努力は、個人、学校集団で出来ないであろうか。たとえ進学のため県内他地区や他県から来て下宿しているものも3校3学級中にあるとしてもである。しかし、それは現在、日本の地域社会の問題としてコミュニティの問題であり、所詮生徒に求めるのは無理かとも思われるが、それにもかかわらず、愛郷心が愛国心につながるものとして考えられなければならないことであろう。ここでは緑丘高生徒の「不満」25%は「全」の12、3高校16%を上回っており、全校生の1/3近くが下

宿生ということからの結果と思われる。

§ 2. 2 自然や過去、将来に対する態度

〔§ 2 (5) (6)〕

ここでは、日本人は自然をそのままの形で愛するということがいわれていたもので、日本人の考え方と対比した西欧流の‘人間の幸福のためには自然を征服していく’という考え方がどの程度うけ入れられているかを見ようとして、‘自然に従う’、‘征服する’、‘利用する’（中庸的）の3つの中1つを選ばせる⁽¹²⁾のに、「全」では、‘人間の幸福のために自然を利用しなければならぬ’が最も多く40%であるが、生徒は更に62%も上回って支持し、次に‘征服がよい’が「全」の34%に対し、わずかに5%と冷静に批判的であり成人と対立する。この‘征服がよい’という回答は第1次調査の1953年から第4次1968年までに23, 28, 30, 34%と積極的に増加しているが、この時点と公害の激化した最近の生徒の調査ではズレが見られ、おそらく「全」でも‘征服がよい’がへるものと考えられる。また「全」のこれまでの調査でも‘自然を利用する’がよいが4回とも4割前後で一番多いし、‘自然に従え’は2割前後ある。「これからみて、‘征服’という考え方は経済成長の著しかった表面的な社会の変化にまきこまれた考え方を含んでいるといえないこともない。」「征服により傾く層は20歳台の中学学歴層、職業でいえば中小企業の事務層や大企業の労務層に代表される層とみることができる⁽¹³⁾とのべておるし、また、後の項目§ 7. 1~2 ‘人間らしさ’ ‘心の豊かさ’で科学や技術の進歩により、どうなるかに対し、‘人間らしさはへる’と、生徒の40%は‘好意的回答’はしてないこと、また、‘過去のことより将来のことの方を考へる’〔§ 2(6)〕前向きの姿勢は「全」の69%以上73%（20歳台78%）である点から、現時点での高校生の態度は、‘自然を利用’62%（「全」40）、‘自然に従う’32%（「全」19）とより中庸的であり、‘従う’中にも‘利用’が含まれていると考えられる。

§ 2. 3 「くらし方と大切なもの」

1) くらし方〔§ 2. (4)〕

「全」で‘趣味にあった暮しをする’32% ‘その日その日をクヨクヨしないでくらす’20%計52%に対し、生徒では前者50%、後者23%計73%と若い者ほど多く、しかも前者‘趣味に従って生きる’が、ずっと多い。これは年齢と世代の関連において「年齢差が拡大し意見の差が大きくなった67の項目の1つ⁽¹⁴⁾」である。そうして、かかる傾向は「20~24歳の若い人々の意見として全体の平均を上回り、また、新たに入ってくる20~24歳の人人はそうした意見を全体の傾向より多くもつということ

がでている⁽¹⁵⁾とされる意見である。そしてまた一般の人々も32%がそうだろうと予想⁽¹⁶⁾しているが、実際はそれ以上52%である。だから「戦前の若い人と現在の若い人のくらし方に対する考え方もかなり変わってきていることはわかるが、同じ変わったといっても、われわれのイメージの上での変わり方とは違っているのである。」⁽¹⁷⁾としている。

その反面‘清く正しくくらす’17%、‘社会のためにつくす’6%計23%の成人は‘趣味にあった’‘楽しくくらす’52%の約半分であるのに、生徒では‘清く’7% ‘社会のため’3%計10%と生徒の1割しかなく、また、‘楽しく、趣味にあったくらし’の73%に対し $\frac{1}{4}$ と成人の $\frac{1}{2}$ 以上の開きをみせている。成人の調査でもこの‘清く’‘社会のため’は15年間に漸減し、「現代の日本人は、古い意見や伝統的な意見、「日本的」な考え方は減少する傾向⁽¹⁸⁾」を示し、また、‘一生けんめい働き金持になる’といったくらしの考え方（経済的意見）も「若い者学歴の高いほど少く⁽¹⁹⁾」成人17%に対し生徒は9%と‘清く’‘社会のため’と同じ比率を示し両者とも低くなる。

この‘くらし方’についての質問の項目は戦前の昭和6年文部省が実施した壮丁教育調査の中から採用したものであるから、上記の結果は壮丁検査時のそれとくらべてみると、現在の成人と生徒との開き以上のものがみられるので、社会的影響や教育上大変興味深いし、大切なので、のべることにする。「昭和15年調査、()の数字はその時の壮丁の23年たった昭和38年における意見⁽²⁰⁾をくらべてみると‘清く正しく’41%（16%）、‘社会のため’30%（6%）、‘金持ちになる’9%（19%）、‘名をあげる’5%（2%）、そして‘趣味にあったくらし’5%（30%も）、‘のんきに’1%（21%も）の順になる。()の数字からみると、若い人なみになっている。‘趣味にあったくらしをする’はずっとふえ、成年より少なめだけれど、もっと消極的な‘その日その日をクヨクヨしないでのんきにくらす’というものが「若い者」より多いし、‘金持になる’という意見も大分多くなっている。こうしてみると、戦前派の「近頃の若い者」よばわりはちょっと気がひけることだろう。「近頃の若い者」に以前植民地化していた大陸を失った現在、外国への進出を求めるのは無理だろう。「近頃のとしよりたち」がオレたちの若いころより生活目標が自己中心すぎて、清廉潔白や奉仕の精神に欠けるといつてみたところで、ご当人たちの現在のデータをみれば往年の意気あがらず、時代が変わったことは、成年の意見や態度だけでなく、すべての年齢の人たちの意見にも現われているのである⁽²¹⁾と、説明している。

この「くらし方」についての考え方、個人的態度は、国民教育の立場からの政府、教師、父兄にとっての重大な問題である。教育の目的からみて、いかなる人格の持主たらしめるか、社会人たらしめるか、学習指導、生活指導をいかに工夫し、対処すべきか。そこには、日本人の国民性の科学的把握、「全」によると時勢の移りかわりからくる時代、社会からの影響、その中での年齢、学歴の違いからの意見の違いも考慮に入れて、意見はだんだん変わりつつあり、古い、伝統的、「日本的」な意見はへるであろうと予想され、また、それ程ではなくとも減りつつあるとのことであるが、之をいかにうけとめるか、また、それ故にここに、「日本人の価値観」の確立という「国民的当為」（和辻哲郎）の至難の問題に直面しているのである。それ故に、「倫社」における「先哲の人生観」の構成と取扱い方の一層の困難さと重要さがうかがわれるのである。「無関心、無気力、無責任、マイホーム主義、をいかに克服出来るか、を真剣に考えなくてはならないと思う。旧の意見と新の意見の交錯、どちらにもきめえない二分、三分の意見をいかに統合するか。価値観の多様性の中にいかに位置づけるべきか考える時、大難関に直面していることを痛感する。

かかる「くらし方」を「先哲の人生観」の中から拾うとすれば、それはエピクロスや老荘のそれに近く、無理をせず、わずらわしい社会の中で出来るだけ避けるか、隠れて住み楽しく過ごそうとする考え方、また、少し積極さを持たせると「現代の思想」の中でのプラグマティズムに似た考え方ともいえるようである。そして、かかる考え方が多数意見となる可能性は多分に予想され、それで「現代社会と人間関係」をいかに解決できるか、これに代る考え方はなにかを探究せねばならなくなる。

なお、かかる考え方が現在の成人さえもそうであるといえようが、生徒のかかる考え方は以下の質問に対する回答においても関連して考えなくてはならない。

2) 一番大切なもの〔§ 2. (7)〕

これも上記の「くらし方」とともに重要な項目である。「全」では「自分（生命・健康を含めて）28%、'子供や家族' 20%の順に「大切なもの」としてあげているのに、生徒（ただし3校全部は確実に出しえなかった）では、「両親」、「愛」、「意志」、「身体」、「誠実」、などの順にあげられ、意外に両親と、次に自分に関する精神的抽象的なものが出ておる。これも生徒の立場からは自己を中心として両親は必要であり、愛は青年期において、友人、異性関係において望ましいし、その次は、強固な意志による勉強、そして名をあげようとするわけか、この「まじめに勉強して名をあげる」という「くらし方」は「全」で6、3、4、3と減少傾

向にあるのに対し、生徒では7%あるのから考えると、成人との立場の相違から、この順も生徒一般の考え方と思ってよいのではなからうか。なお、これを成人でも20歳台前半や学歴別の調査とくらべてみると、29歳台では「愛情、精神」を一番大切とするものが最も多く25%（第4次）、そしてこれは年齢別でも最も高いこと、学歴別では大学卒がこれを支持して最も高く28%、そして両者とも「生命・健康」が2位23、24%であるのと関連してうなづけるものである。ただ「両親」は集計グラフ(22)には「家族」「子供」「家先祖」しかなく、出ていないので比較できないが、しかし生徒には両親が特に出て来たといえよう。「子供」は問題にならないからと思う。

なお「くらし方」の中で「まじめに勉強して名をあげる」のが成人より多かったが、これも20歳台の大学（サンプル数少ない）の支持率とほぼ同じ7%である。そして「仕事・信用」が20歳台では10、大学卒14%あり、「大切なもの」としては4位、3位となる点生徒ではこれを「勉強」とおきかえると順位もほぼ同じといえよう。また、これを「大切な道徳」、「親がキトク」〔§ 5. 身近な社会(1). d, b〕での回答とも関連させてみても一貫しており、大体の傾向といえよう。

§ 3. 宗 教

これについても、日本人の国民性として重要な内容をなすものであり、またそれがどのように定着しているのか、その傾向を知る意味でとりあげられているが、これも道徳教育における宗教的情操の涵養の上からも倫社の「先哲の人生観」でとりあげられていることであり、高校生がいかにみているかについて触れることにする。

1) 信 仰

(1)宗教について「あなたはなにか信仰とか信心とかを持っていますか」の問に対し、「もっていない・信じていない、関心がない」が「全」の65%に対し82%と相当上回って否定するものが多い。

そして、信じていなくても「宗教的な心というものを大切だと思いますか」の問に対して、「全」では、信じてないものも「大切でない」と否定するものは14%しかないのに対し、生徒では23%と多く、それに「分らない」「不明」を加えると、「全」より否定的な者が相当多いものといえる。このことは、次の(4)人々の宗教への態度についても、「世間の人々は宗教について十分考えてない、とするものが、「全」で65%ある如く、生徒もそれ以上80%もあり、それは宗教について、「信じてない」82%と対応し、自分で信じてないから世間の人々も十分考えていないだろうとなるのであろう。なお、この点アメリカの白人男子の調査(1945年)でも、約¾がやは

り十分に考えてない⁽²³⁾とあり、日本だけに限らない現象といえる。

なおこの「信じてないが宗教心は大切」とする意見は典型的日本人の意見⁽²⁴⁾であり、また大多数意見⁽²⁵⁾の1つとして76%もある。⁽²⁶⁾なのであるが、生徒は大いに違っておる。

関連して20～24歳台では「信じない」もの89%と生徒以上であるが「宗教心大切」とするもの52%と生徒の37%よりは多い。信じない者は若年層に多いけれども「宗教心は大切」とするものは大学卒でも「信じない」77%と他の学歴以上に多い割に、また65%と最高を示している。この点生徒には不明が22%もあることから「宗教心は大切」という項目は「大切」「大切でない」も37対23と、成人の大きな開きにくらべて接近して、そして「分らない」「不明」が計32%あることからみて迷っているものといえよう。「大切」37%というのは小学卒39%並であり、中卒49%、高校卒59%と「全」に出ている⁽²⁷⁾から、この「信じてないが宗教心は大切」とする意見が前述の如く、典型的日本人の大多数意見とするならば、また「信じない」が年齢の進むにつれて少なくなっている(60歳以上は42%と最近)⁽²⁸⁾ことからみて、年齢と世代の関係からみて、年齢による意見の差は大きい。しかし「時期的に大きな変化はなく、年齢による差も変わらない、意見の断絶があり、その様相は15年間不変」⁽²⁹⁾としているけれども、小・中・高での学校教育における宗教的情操の滋養が不充分なのではなからうかと思うし、また、現在の社会不安に対する宗教の役割を思うならば、高校ならば国語、日本史、世界史、倫社などで宗教の扱いを工夫すべきではなからうかと思うのである。日本だけでなくキリスト教諸国においても前述のアメリカ人の例の如く、宗教心はなくなりつつあるのに、之に対する対策は充分とられてないのではなからうか。そして、それが社会不安、人間疎外化をますます進めてゆくことになるであろうと懸念されるのである。国民も「宗教は信じないが宗教心は大切というのが多数意見(69%、52%を示す)であるが迷っている」⁽³⁰⁾のである。国の内外を問わず政府の宗教政策、学校の宗教の取扱いが問われておるといえよう。なお、これは、次の宗教か科学かという間にも関連しても考えられることである。

2) 宗教か科学か [§ 3. (6)]

「あなたは宗教というものについてどう思うか。次の4つの意見のうち、あなたの意見に一番近いと思うものを選び」という時、「人間の救いには科学の進歩と宗教の力ががたすけあってゆくことが必要である」とするものが最も多く、「全」63、生徒44%であるが、生徒は相

当下回る。そして「全」では「人間を救うことのできるのは科学の進歩以外にはない」10%、「人間を救うことができるのはただ宗教の力だけである」9%、「科学が進歩しても、宗教の力でも、人間は救われるものではない」8%と、残りの3つの考えはいずれも少数意見で同じ位に3つに分かれている。これに対し、生徒は「科学も宗教も人間は救われない」19%と、成人の8%の倍以上を示し、救いについては大人より悲観的、否定的にみえる。「科学の進歩のみ」5%、「宗教の力だけ」1%と肯定は成人の10%、9%を大きく下回っている。この点、年齢的に近い20歳は前年や学歴別でどうなっているか見ようと思ったが、データが見当たらないので残念である。

3) 「あの世」を信ずるか [§ 3. (5)]

この項目については「全」では「信じない」59%、「信じる」20%となっている(1958年)のに、生徒では意外にも「信じる」33%、「信じない」23%(男生徒の方が信じないのがいくらか多い)となり、成人と逆になっていることである。宗教や宗教的な心については成人よりも否定するものが多いのにこれはどうしたことであろうか。また「信じる」と「信じない」の間になる「どちらともいえない」も「全」の12%に対して26%と多い。これも年齢別、学歴別のデータからみる時「あの世を信ずる」もの60歳以上52%位を最高に、50歳台47～8%、30歳台後半46%、そして20歳台42～3%と日本および欧米各国での同時調査(1969年)平均42%(否定38%)、日本人では神社の神を信じるもの49%(否定35%)と「あの世」だけが肯定する人の方が否定する人よりやや多いとのべておる。⁽³¹⁾そして「宗教を信じる」「神社の神を信じる」「あの世を信じる」が60歳以上では平行してどれもトップであるのに、20歳台前半では「宗教を信じる」は最低13～4%なのに「神社の神」は28～9%、そして「あの世」は42～3%と信じるものがふえておる。高校生もそれに応じた考え方ようである。これは年齢に比例し、学歴からみると逆になっている。前述の「全」では「あの世を信ずる」が20%であったのにこの宗教調査では42%と違うのは10年の開きがあることに原因があるのだろうか。しかし新しいこの調査と生徒との比較からみると年齢別に共通した傾向といえそうである。しかし、何故かは究明しなければならぬ問題である。

なお「あの世」といった宗教的概念の存在を欧米8カ国と日本がどれだけ信じているか、最高と最低、そして日本の肯定順位をあげると最高はアメリカ73%、最低はフランス35%、日本は9か国中5位となっている。日本はけっして他の国民とちがった宗教的態度を示している

とはいえない⁽³²⁾とのべておる。しかしとりわけ宗教的国民というわけにはゆかないだろうと思う。

4) 性善・性悪 [§ 3. (7)]

‘人間の本来の性質は善であるか、悪であるか’の問に対し、‘人間の性質は本来善でも悪でもない’35%から‘善である’31%、‘善でもあり、悪でもある’25%と「全」では考えるのに対し、生徒では‘善でもあり、また同時に悪でもある’45%（緑丘高65%）が最も高く、成人よりも積極的に人間が善にも悪にもなりうるものと肯定的である。次に‘善でも悪でもない’25%と成人の35%より否定が少なく、人間に対しきびしいというか、曖昧にみえる態度を嫌っているようにみえる。そして3番目に‘善である’14%と成人の31%の半分しかみない。だから‘悪である’も成人の2%に対し7%と多い。

もっとも、この性善・性悪の調査は1953年第1次のみであるから、それより20年後の高校生との比較では社会情勢の変化も考慮に入れねばならぬであろう。現在成人を調査したらまた違ってくるであろうと思われる。さしあたりこの両調査からみると、成人の場合は‘善’‘悪’の比率は31%と2%という如くその開きは随分大きいし、楽観的といえよう。また‘善’31%と‘善でも悪でもない’35%ではその開きは小さく、善から中立的な弱い好意的態度となり、そして次に‘善でもあり悪でもある’25%という順に大体 $\frac{1}{3}$ 程度に分かれ、判断に迷いがみられ、決定的なものがみられないけれども安定しているようにみえる。之に対し生徒の場合‘善’14%、‘悪’7%とその開きは成人より小さくなり接近しており、‘善’と‘悪’は成人よりもはっきりと対立的にみえる。そして‘善でも悪でもある’45%、‘善でも悪でもない’25%と両者の開きは成人より大きく、‘善’‘善でも悪でもある’、‘善でも悪でもない’この三者は成人より不安定な分裂を示しており、しかも否定的態度が強いといえる。

ここには、青年期のよき意味の特徴ともいうべき理想主義的傾向は「くらし方」[§ 2. (4)]においてと同様みられず、現実的ドライな傾向というべく、またある意味では大人の甘い楽観的考えに対する青年期独特の批判的、直情的、そして右と左にはげしくゆれ動く不安定な、そして幾分悲観的、暗い様相がうかがわれる。そして一般にいう青少年の無関心、無気力、無責任というものも大人や社会における矛盾、大人の側の無理解、拒絶、甘い考えのおしつけに対するレジスタンス、拒絶であり、更に自己自身の無力感、懷疑から自己の都合のよいように考えての態度とも思われる。‘性は善なり’と生徒も考えたいであろうし、そうした社会を期待してい

るであろうけれどもそのようには思えないという気持ちが潜んでいるであろうと思う。

「人間らしさ、心の豊かさ」[§ 7. 1~2]

この生徒にみられる悲観的、否定的態度、は次の§ 7. 一般の社会的問題の中での(1)(2)の項目で‘世の中はだんだん科学や技術が発達して便利になってくるが、それにつれて人間らしさがなくなってゆく’という意見に‘賛成（人間らしさがへる）’が40%と反対35%よりやや多く、しかもこの傾向は15年間の4回の調査を通じて強まってきておる。すなわち機械文明に対して日本人は完全に楽観的とも悲観的ともいえない迷いがある。「新しい時代についての日本人の気持は、肯定と否定の間をゆれ動いているのが実情といえよう。」⁽³³⁾とのべているが、生徒は‘いちがいにはいえない’56%（「全」16%）の次に‘へる’35%（「全」40%）、‘変らない（反対）’6%（「全」35%）と大きく否定する。

また‘どんなに世の中が機械化しても、人の心の豊かさはへりはしない’に賛成するものが成人では半分前後で、しかも4回15年間あまり変化のない楽観ムードが出ているのに対し、生徒では「人間らしさ」の場合と同じく‘いちがいにいえない’50%、‘へる’28%（「全」22%）、そして‘へらない’が16%（「全」56%）しかない。

このように生徒では‘人間らしさはへる’35%、‘心の豊かさはへる’28%と大体 $\frac{1}{3}$ 程度は‘へる’と見ている。この場合‘いちがいにいえない’と慎重に保留型が両者とも半数ほどあり（成人では16、13%）、成人よりずっと多く、成人ほどはっきりしていないから、これがはっきりすれば成人のように‘へる’‘へらない’が接近し迷いがみられるかも知れない。しかし残りの半数近くは迷いがなく、悲観的である。前の「宗教か科学か」[§ 3. (2)]の答と一貫しているといえよう。

しかし、この‘人間らしさ’‘心の豊かさ’の2項目については「人の心の豊かさはへらない」が多数意見⁽³⁵⁾とされ、変化の小さい意見、「年齢によるも時期によるも不変のもの」⁽³⁶⁾とされ、‘人間らしさはへるか’も年齢差、時期差不変である⁽³⁷⁾し、20歳台前半で‘人間らしさはへらない’が44%（「全」35%）なのに生徒では6%、また‘心の豊かさはへる’も24%（「全」22%）に対し生徒では28%と年齢別の違いが相当あり、‘へらない’も63%（「全」56%）に対しわずかに16%と大きく違っている。‘いちがいにいえない’という者が半数もあるためこういう風になったといえよう。なおこの‘人間らしさはへるか’については高学歴の層が悲観的な見方を強めており47%（大学卒）、（平均40%）⁽³⁸⁾もある。

激しい技術革新のもとで将来をどう見ているかという
と「将来の社会に対して、日本人はけっしてバラ色の夢
をもっているとはいえない」(39)と「全」でのべている
が、それは次の「21世紀の世の中」〔§ 7(2)b)〕につい
て「不愉快なことはいと変わらない」53% (生徒35
%) ‘ふえるだろう’ 24% (生徒35%)と、これまた生
徒の方がより不安、悲観的であり、この点高学歴の意見
に近く、一層はっきりしているようにみえる。

こうした違い、不明の多い生徒に対していかに指導す
べきか、大人にも迷いが出てきており、悲観的になる予
想の多い時点において、一層の戸惑いと困難さ、それ
にもかかわらず教育的使命はのがれえないのである。次
に、1個人的態度の終りに、「全」では後に扱っておる
「立派な人物」〔§ 9.(4)〕を生徒はどう見ているか、
成人との違い如何をここにのべることにする。

「立派な人物」について

ここに22人の歴史上の人物があげられているが、その
中で‘非常に立派’と評価されている者は「全」の成人
では野口英世68%、二宮尊徳65%、明治天皇65%、聖徳
太子65%、湯川秀樹59%、福沢諭吉53%、乃木希典50%
と過半数の日本人が考えているのに対し、高校生(別府
地区のみ)でも、上記の成人と順位はあまり変わらない。
すなわち、トップが野口英世70%。次は少し開いて2位
は同じく二宮尊徳ただし41%と落ち、福沢諭吉6位が3
位となり40%、聖徳太子は同じく4位39%、湯川秀樹同
じく5位38%となっておる。そして明治天皇は成人で3
位であったのが6位に落ち、しかも10%しかない。(な
お私事にわたって恐縮であるが、二宮尊徳については小
生すぐれた実践家、農村指導者たるのみならず、単なる
野州聖人以上の自然から学んだ大思想家として、現代社
会においても推賞すべき人物として、芸術短大の研究紀
要第2巻(1963.10)にもその倫理思想をまとめて発表
したのであるが、2位を占めることを嬉しく思うのであ
る。そして現行の倫社の教科書の多くにも扱うべきもの
と願っておるものである。)

続いて‘立派な人物’として伊能忠敬26%、菅原道真
23%、吉田松陰(同)、伊藤博文20%となる。伊能忠敬
は成人では21位(22人中)であるのに、ここで7位とな
るのは、市内流川通に記念の標柱があることから特に小
・中学で教えられているからであろうか、この地区に限
られるのかもしれないが意外である。なお、更に低くな
るのは楠正成(成人38%で12位)8%、原敬6%、東郷
平八郎6%(41%、11位)、中江藤樹5%(20%)、源
頼朝4%(14%、20位)、そして最後尾は成人と同じく
足利尊氏2%(7%、22位)となっておる。

また、‘よく知らない人物’として、成人では吉田松

陰、新井白石、中江藤樹、原敬、伊能忠敬を4割以上が
知らないと答えているのであるが、高校生には4割以上
知らないとされている人物はいくらか少ない。しかし、
中江藤樹を7割もが‘よく知らない’とし、また成人が
‘非常に立派な人物’とし7位である乃木大将、11であ
る東郷元帥も高校では半分は知らぬとなり、中江藤樹は
日本史や倫社の教科書には出ているのにこれは?と思う
のである。しかし、成人では意外にも4割以上知らぬと
される吉田松陰は生徒では2割程度知らぬであり、‘立
派な人物’として「全」では16位にあるのに、高校生は
7位におき評価が高い。これは青年の理想的人物とし
て、悲観的な現代においても共鳴できるからであろう
か。

この「歴史上の人物」についての評価については、小
・中・高の教科書での理想の人間像や先哲の人生観と関
連して更に検討せねばならないし、また広範囲でのまと
まった調査を思うのである。進行中の家永訴訟問題を機
として教科書研究も進められねばならないのである。以
上歴史上の人物の評価については成人のと多少の開きは
あるものの、あまり著しい相違はないようであり、成人
と対立しているようにもみえない。その点、既述の悲観
的拒否的態度は過去の歴史上の人物に関することだけに
少ないといえよう。ただそれならば理想の人物をこれら
の指定した人物をはずして自由にあげよとすると、また
大人と多少異なってくることも予想される。そこに世代
の違いからくる断絶も生じよう。「全」でも‘立派な人
物’の判断の模様はやはり学歴の別による判断の差異が
大きい。つい年齢的な要素が加わるとのべている。(40)
ここにも価値観の葛藤もみられるであろうし、生徒指導
や倫社での学習指導の工夫も必要となってくるものと思
われる。

II 社会的態度

以上において、1「個人的態度」についての分析、考
察を倫社の「人間性の理解」「先哲の人生観」と関連さ
せて進めてきたのであるが、次に「社会的態度」に関係
する項目に移ることにしよう。ここでは主として人間関
係における考え方、人倫といわれるものについての考え
方、いわゆる義理、人情や恩に対する態度といったもの
を中心として、§ 4. 子供・家、§ 5. 身近な社会、§
6. 男・女差別、§ 7. 一般の社会的問題、§ 8. 政治
・権威に対する態度、§ 9. 日本人・人種の項目につい
て「全」との比較でのべることにする。

だから、「個人的態度」は人間の内に向う心情的な態
度であるとし、この「社会的態度は人間の外に向う心
情、態度、社会関係的にあらわれるものとして、倫社で

の「現代社会と人間関係」での家族、地域社会、職場、民族、国家と対応し、最後に政治、権威の項目は倫社の終章をなす「民主主義の倫理」と関連するものとして扱ってみようと思う。

§ 4 子 供 ・ 家

§ 4. 1 子 供

1) 教育上のウソ

‘先生が悪いことをした’ というような話を子供がきいてきた時、親はそれがほんとうであることを知っている場合、‘子供にはほんとうだといった方がよい’ と肯定するものが「全」では第1次から4次までに42%から52%とやや増加する傾向を示しているが、生徒もそれ以上に55%である。ただし緑丘高では38%と少なく、‘そんなことはない(否定)’ が40%とやや多い。他の2校を含めて平均23%となり、成人でも29%である。

この点、以前は教育的ウソ、善意のウソというようなものを認める傾向があったけれども、もはや多数意見ではそうした意見の持主ではなくなったことを物語る面の例として指摘している。(1) すなわち「主観的」にみた典型的日本人の意見では‘そんなことはないという’し、また‘いうだろう’となるのに(2)、「主観的」にみた非日本人的な意見として‘ほんとうだという’のがふえてきたというのである。(3) そうすると、この項目については緑丘の生徒は典型的日本人の意見が強いし、他の2校は所謂非日本人の意見が多いということになり、相当違っておる。三校間では違っている大きい例である。これはどうしてであろうか。これは小規模校と大規模校、マン・ツウ・マン的な音楽、美術の学校と普通高校との違いのための教師観の違いであろうか。考えが旧いからであろうか。だが、この緑丘の音楽クラス(女子)も人間の性善、性悪では‘人間は善でもあり、悪でもある’とするのは、他の2校よりずっと多く、‘善である’も最も少なく、その点高校生の方が成人よりもきびしかったが、同じ生徒でも特に緑丘がきびしかった。とすると全校生徒の1/3近くが下宿生である事情から、先生には親近感を抱き、寛大で甘く、世間には、他の2校生よりも多く日常接する現実から、娘心にきびしく感じとっているからともいえそうである。

なお、この‘先生が悪いことをした時’の質問項目はいろいろな観点、立場がまざりあい複雑な見解が示されていると「全」(4)でのべており、生徒の場合も断定しにくいものがある。

2) 子供の育て方——‘金は大切’、‘メンツは大切’、‘自由か規律か’〔§ 4. (5)(6)(7)〕

1. 金

‘子供に金は大切と教えることをどう思うか’につい

ては、成人では‘賛成’57%と半数をこえ、これまで金のことをいうのは下品だという考え方があったが、もはや変わってきて‘いちばん大切’と‘賛成’が多数意見の1つとなっておる。(5) 生徒の場合(女子のみであるが)‘賛成’5%しかなく、‘反対’は成人の28%に対し40%と多くなり、また‘いちがいはいえない’が成人の12%に対し50%もある。「金」でも若い年齢層ほど反対が多く、大学卒の学歴層で反対が多く、両者とも50%位で断然多い。(6) そして‘この学歴別にみた意見の開きは他の質問項目での学歴別にした差異にくらべても大きなものの1つであり、子供の育て方についての複雑な一面をみせている。(7) とあるが、この女生徒の考え方は%からみるとき大学卒並となる。強く反対する根底には、親が金々ということに対する反感、金の苦勞も知らず、しかもインフレ的な経済状態の中で金の価値がさがり、つい金や物を粗末にする傾向からの甘い安易な考え方に、‘金が一番大切’なのではなく、文化や教養、芸術こそ大切と考える高学歴層につながる考えからの反発も加わって‘物質主義」「拜金主義」と蔑視する「主観的」にみた典型的日本人(8)らしい意見をのぞかせているともいえそうである。そして、この‘子供に金は大切’は否定も肯定もともに年齢差は拡大する(9)と指摘している。今後においても、この項目に関しては年齢差、学歴差につれて変わり、多数意見も崩れてゆくものとも考えられる。大げさにみるならば資本主義国と社会主義国における金の見方の違いになるかとも考えられよう。

このように‘金は一番大切と教える’ことには反対する、そして‘金や名誉を考えず自分の趣味に合った暮らし方をするのが全国どこも、もっとも多く、現在の生活では「満足」「まあ満足」が71、8%で全国平均67、1%よりかなり高い、(10) 青少年の意識であっても、‘現実においていちばんほしいもの’は‘お金’が一番多く、世界の若者13%、日本18%であり、(11) 現実ほしいものは金であろうが、しかし、それは生活のための、生きがいのためのものであり、「金そのものの価値」を高く認めているのではないということになる。

2. メンツ観〔§ 4. (6)〕

このことは、次の‘小学校に行っているくらいの子供をそだてるのに小さい時から自分の顔とかメンツをつかさないように注意しろと教えるのが大切かどうか’という問に対し、‘大切とする’もの「全」の36%に対し、わずかに1%しか生徒にはない。この大きな開きはどう見るべきか。この項目については「全」に年齢別、学歴別の集計グラフがないので比較できないけれども、ここにも、各世代の育った社会的要因から異なる考え方が生

じているといえよう。ベネダイクト女史のいう、いわゆる典型的日本人らしい考え方‘恥意識’的な面の稀薄化が、青年の無責任といわれる面と関連してうかがわれる。

教育基本法にうたう「勤労と責任を重んずる」教育はどうなっているのであろうか。前の‘金’とも関連し、勤労を重んじ、その結果えられる金を大切に使い、また責任を重んじ、他に対する恥のみでなく、自己の良心にてらしての面目を自覚させる教育が充分行われているとは考えられない。このことは次の項目とも関連する。

3. 自由か規律か [§ 4. (7)]

同じく‘子供に小さいときから、自由の尊さを教えるのと、規律の尊さを教えるのとでは、どちらが大切だと思いますか’の問に対して、成人では‘自由の尊さを’20%、‘規律の尊さを’68%と、後者がずっと多く支持され、それはここ15年間変わりはなく、「恒常性から見た日本人の国民性」として、変化しなかった意見の1つ、⁽¹²⁾とされておる。ところが、生徒では‘自由を’40%、‘規律を’37%と成人と逆になり、しかもその差は小さい。これは20歳台前半でも‘自由を’34%ともっとも多いのよりも多いし、大学卒でも21%しかないのに比しずっと多い。やはり、この辺生徒が社会的でなく、自己のみにかかわって考える自己中心的態度から他とのかかわり、社会のきまりよりも自己の自由を重視し、社会的な観点から子供を抑圧せんとするかにみえる大人や、‘しきたり’への反発といえよう。前述の§2. 個人的態度(1)「しきたり」と関連しての現われであろう。まだ子供を教育する地位にないことから考えもそこまで至らないことから、やがて成人すると共に次第に成人の意見‘規律の尊さ’を教えるに至るものと思われる。

§ 4. 2 家

1) ‘結婚式・葬式を盛大にするか’ [§ 4. (8)]

ここでは日本人のものの考え方の断面として、家族制度とか家の問題がとりあげられねばならないが、その家の対外的機能の1つである冠婚葬祭に関するものとして、家のあり方と関連して生徒はどう思っているかのべることとする。結婚式、葬式については‘多少金がかかっても盛大にやることをどう思うか’という問に対して、‘よくない’が成人の37%に対し15%と意外に否定が少なく。この場合女生徒は10%に対し男生徒は20%であり、やはり女子には一生の大事だからという気持ちが男子より強いからといえよう。しかし、それならば盛大にやるがよいかとなると‘盛大にやれ’というのは、成人の7%に対し3%と健全である。ここでは男生徒は6%が盛大を支持し成人に近い。また‘身分相応にやれ’の

堅実型が成人の50%に対し75%もあり、この考え方はそう成人と差はない。「全」でも‘身分相応に’というのが多数意見(47%)、⁽¹³⁾であり、年齢差も学歴差も少ない。⁽¹⁴⁾この点生徒の方がより「個人主義的意見」⁽¹⁵⁾を持ち、また、金のことにはこだわる「経済的意見」⁽¹⁶⁾に近づいており、成人が迷っている面⁽¹⁷⁾を通りぬけ新しい意見を支持しているように思われる。

2) 本家、分家、養子 [§ 4. (9)(10)]

1. 本家、分家を考えるか。

この家のあり方については‘考へに入れることあり’と成人は55%あげているのに、女生徒で22%、男生徒はわずかに6%ときわめて少なく、旧い制度・しきたりに対し無関心、無理解というか否定的にみえる。ここでは女子の方が同じ2年生でも先の事や身近な事にませているのだろうか。

2. 他人の子供を養子にするか。

これについても、成人に比しきわめて少ない。なおこの場合も‘場合による’と答えるもの5~6割もあり、絶対反対という程ではない。若く経験乏しく、考える必要もないからであろう。なおこの‘養子にしてつがせる’という回答は「全」⁽¹⁸⁾でもこの15年間の結果は大きく変わり、変化量の最も大きいものの1つになっておる。しかも、これは‘年齢による意見の差は大きいがかし、時期的にははなはだしく回答が変化しているのが特色である’⁽¹⁹⁾とのべている。これを年齢別、学歴別にみると‘つがせる’は高年層に多く、低学歴層多い。生徒はそれ以上に少ない。また‘つがせる’という回答も経済的な観点からが多く、主体は農林漁業者層であり、家名存続等の家族制度に関係はなさそうであるとのことである。⁽²⁰⁾別府の子供の家では農林漁業関係は少なからうから尚更少ないということになる。

3) ‘先祖を尊ぶか’ [§ 4. (11)]

成人の77%に対し生徒では20%にへり、‘普通’だとするものが成人15%に対し60%もある。これは尊ぶという程意識はもてないし、また家でもそれ程意識していわれる機会も少なくなっているからではなからうか。年齢別、学歴別の集計が出てないので比較できないが、多分この先祖についての観念は若年層程薄いのではなからうかと思われる。高学歴においてはどうであろうか。郷里をはなれ他郷に久しいと墓地も仏壇もない家庭が多くなり、典型的日本人らしい意見も減少してゆくものと思われる。

§ 5 身近な社会 一特に義理、人情について一

§ 5. 1 義理人情に対する態度

i) 恩に対する考え

1) ‘恩人がキトクのとき’ ‘親がキトクのとき’

〔§ 5. (1), (1)b〕

「この時会社がつぶれるか、つぶれないかがきまってしまう大事な会議があるとしたらどうするか」の間で、恩と社会的責任の競合の場合における選択を迫ったら「何をしておいてもすぐ帰郷」と「故郷のことが気になっても大事な会議に出席する」がほとんど同じ位46%、47%であるが、生徒では「すぐ帰る」47%「会議に出席する」32%となり、社会的責任よりも恩人のキトクが大事だと考える。しかし「分からない」が成人の5%に対し15%とふえている。また「キトク」でも親の時帰るのが成人よりも多く、成人は恩人のキトクに帰るのが多くなっている。

この点第4次調査(1968年)では、45歳をすぎると「故郷に帰る」が増加し、年齢的に断層がみられる。

また、20~24歳では特に「故郷へ帰る」ものが多くなり、それも親の場合に著しいとある。(1) この点高校生と共通しておる。また「全」によると「郷里に帰る」、「会議に出る」が同じ程度45%程度であり、むずかしい状況であるので迷いがある。15年間の経過をみると「郷里に帰る」が減少の傾向にある。(2) この項目は「主観的」にみた典型的日本人としては「恩人のキトクには帰り、親の時は会議に」というのが日本人らしい意見であるが、それも、最近多数意見としても迷いがみられ、両方の場合同じになったり、故郷に帰るのがへるといった「合理的意見」(3) がふえ、若年層や高学歴層「会議に出る」(4) といった20歳台の時代的動向からみて少し傾向の異なる(5) とされるものも出て、この項目は学歴別、性別、職業別の差がかなりみられる(6) とされておる。だからこの項目についての生徒の考え方は、若いから社会的責任を成人程には理解しえないし、分からない者もふえ、また軽く考え、自己と身近なかかわりを持つ「親や恩人への恩」により従うと考えるのは自然と考えられる。

2) 入社試験(親戚、恩人の子)〔§ 5. (1)c〕

入社試験の時恩人や親戚の子が2番であったとき、それでも1番の子をとれというかどうかとの間に対し、恩人の子の場合、成人でも生徒でも「もちろん1番の人をとれという」のが54%、50%と大差ないが、しかしまた「それよりも恩人の子をとれ」というのも39%、30%と、これも成人と生徒では大差なく接近しておる。親戚の子の場合も成人では「もちろん1番の子をとれ」とするもの78%もある。これは「大多数意見」(7) であるが、しかし日本人らしい意見(8) からすると「親戚の時は1番、恩人の子の場合は恩人の子を採用」すべしだとなっている。「合理的意見」からすると「いずれも1番の人をとれ」ということになる。そしてこの意見は年齢的に差はな

く、高学歴層程高くなっている。(9) してみると、ここでは生徒は「親戚の人をとれ」30%と成人の17%よりも多く、「1番の人をとれ」が50%であるから、この点生徒は成人が考える程恩をそれ程意識せず、自然の血縁関係に従う傾向が強く、「キトク、の時と同様であり、必ずしも合理的ではないといえる。

ii) 「大切な道徳」に関する考え〔§ 5. (1)d〕

「大切な道徳、つぎのうち、大切なことを2つあげてくれといわれたら、どれにしますか。1. 親孝行をすること。2. 恩返しをすること。3. 個人の権利を尊重すること。4. 自由を尊重すること。」と、新・旧の徳目と思われれるものをそれぞれ2つずつあげ、それから2つあげよとの間に対して、生徒は「親孝行をすること」58%(この場合男生徒44%、女生徒66%と女子の方が多い)その次に「自由を尊重する」が50%と続き、成人と順位も同じく、その比率もほとんど変わらない。

この点「親孝行」が「自由尊重」や「恩返し」という新しい徳目とも適度に共存し、なかなか面白い関係、簡単に割りきれない様相が見られると、「全」で指摘している。(10) やはり「主観的」にみた典型的日本人からみて「大切な道徳」として4つあげたものの中から2つあげるとすれば、旧・新の徳目が2つずつ示されていけば、旧にも従いたい、そこで「親孝行」「恩返し」をあげたい。(11) けれども、また戦後の新の意見、民主的な横のつながりの中での「個人の権利尊重」や「自由の尊重」も大切だとしてほぼ同じ位に選ぶ(順に61, 45, 44, 46%)(12) のは、日本の社会の転換期過渡期に直面して「親孝行」は多数意見(13) で変わらないけれども、縦のつながりとともに横のつながりをもたねばならぬ気持が、日本人の重層的精神構造において割りきれない様相とはいえ調和さるべきものと思ひ、願っているからではなからうか。

高校生の場合も大人ほどしみこんでいないとしてもやはり日本的であるといえる。しみこんでないと思われる節は4つの徳目から2つあげるのに多いから順に示すと、成人では親孝行、自由、恩返し、権利となるのに、生徒では親孝行、自由、そして権利、最後に恩返しとなり、この「恩返し」は成人の45%に対し11%となり、新の徳目支持が少く、恩返しを大切な徳とするものが少ないことである。この点成人の調査でも「恩返しをあげるもの、あるいは「権利の尊重」、「自由の尊重」をあげるものは年齢的にみても大きく比率が異なり、世代の断絶とでもいふべきものの典型的な例の1つと考えられる。(「恩返し」をあげるものは高年齢層ほど、逆に後の2項目は若い年齢層ほど比率が高い。) また「どの学歴層でも高年齢層ほど大切な道徳として「権利の尊重」

をあげる比率が低くなり、同一年齢層について考えてみると、どの年齢層でも、学歴の高いものほど‘権利の尊重’をあげる比率が高くなっている。逆に、一番‘恩返し’に消極的な学歴層は大学ということになる。(15)

なお、この‘親孝行’についての予想調査での‘いまの20歳くらいの人はどんな考え方をしていると一般の人は考えているか’と問うて答えさせたら、わずか7%しか出て来なかったが、実際の調査では若い人が‘親孝行’を57%もあげており、(16) 実際とイメージが随分くい違っており、‘実際の調査の結果をみても、戦前と現在とでは、若い人のくらし方や大切な道徳に対する考え方もかなり変わってきていることはわかるが、同じ変わったといっても、われわれのイメージの上での変わり方とは違っているのである。(17) としている。また、「実際の回答と、回答を予測したものとの相違が大きいのは、いわゆる伝統的な古い日本人の意見と考えられるタイプの意見に関するものであることは注目すべきである。現代の日本人にはイメージとしては古い伝統的な感覚が多く残されているが、実際には、それがかなり思いすぎであることがみられて面白い」(18) とのべ慎重である。また、‘親孝行’について学歴層ではもっとも高い大学卒が43%と最低、小学卒が73%と最高、‘恩返し’と同様であるのも意外で教育をするほど典型的日本人らしからぬ考え方になって行くようである。‘現代の日本人は、やはり新しい意見が増加し、古い意見や伝統的な意見、「日本的」な考え方は減少する傾向が感じられる、(19) とし、‘個人の権利尊重’を大切な道徳とする個人主義的意見、を大学卒が持つとしても、(20) 親は何のために子供を教育したかと情なく思うであろう。老人問題の重大性が痛感される次第である。

この「大切な道徳」の項目の回答において残念なことには生徒に‘不明’が33%もあることである。だから%が多少変わるとも思われるが大体の傾向は変わらないものと思っておる。ただ、その判断に迷うところに複雑さがあるとしても出しえない処に問題があると思う。新・旧両徳目がそれ程理解されていないからだろうか。教育しても大学卒の考え方では困るし、それまで教育できぬとしても困ると思う。しかし、数字に出てくる限りでは‘親孝行’が成人と同じくトップになっており、それは前述の§ 2. 個人的態度(7) ‘一番大切なもの’として回答完全ではなかったが、両親をあげたのが多かったことと関連してやはり‘親孝行’が多いのではないかと思うのである。

そして、この身近な親を除いては‘家族・国家中心よりも個人中心、〔後述§ 7(3)〕、‘規律よりも自由、〔前述§ 4(7)〕を自己中心的主観的に考える「社会的態

度」を示しているといえるのであり、生徒はより直情的にであるとしても、自己を中心とする‘楽しい豊かな生活’〔§ 2(4)〕を、あまり期待できない世の中〔§ 2, § 3 宗教〕において築き上げたいと思っているのではなからうかと思える。「恩返し」についても生徒は「大切な道徳」とするものが意外に少なかったが、これは「若年層では無視するものが多く、高年層では著しく重視されている」(21) とあったが、それでは‘恩返しは戦前にくらべてなくなった’〔§ 5(1) f 戦前との比較〕とするもの、成人で66%あるのに、生徒では40%と少なく、‘分らない’というものは成人では7%しかないのに、生徒では30%にもなる点、大人から昔のようにはないときかされてもよく分らないか、また軽くそうかと思ったりするのではなからうか。そしてこれはやがて無視する傾向になるのではなからうか。

iii) 上役に対する考え

1) 目上の人に対しても 〔§ 5(4)〕

‘誤解はその場でとく’というのが、成人43%に対し60%と多く、「目上に使われる時」も‘道徳的に’また礼儀正しくする’が成人の倍以上あるが、しかし‘上役に服従する’如きはきわめて少なく、成人の24%に対し5%にすぎない。これも間違ったことはたとえ上役であっても許さない。自己を主張し、服従には抵抗的な姿勢といわるべく、長いものには巻かれる式の古い態度には反発的な新の意見を代表するものといえよう。それは次の質問への回答でも同様である。

2) ‘めんどろをみる課長’ 〔§ 5(6)〕

‘時には規則をまげて無理な仕事をさせることもあるが、仕事のこと以外でも人のめんどろをみる方がよい’とするのが成人では84%と断然多く、しかもそれは4回15年間ほとんど変わらないが、この点高校生でもやはりこれを‘よし’とするものは70%あり、成人よりも少ないとしても「日本人の主観」からみて、よき意味の日本的なものとしているのだと思う。

しかし、‘仕事以外のことは人のめんどろをみない課長がよい’とするもの「全」の12% (15年間あまり変わらない) であるのに対し、生徒では20%となるところに公的な仕事以外の私的な生活にまで干渉して貰いたくない。また、しなくてもよいといった自己主張的な、前述の「趣味に合ったクヨクヨしない生活」を謳歌するマイ・ホーム的な考え方からの、日本の古いもの、義理人情的なものへの煩わしさ、反発さもあると思われる。

なお、この‘めんどろをみる課長がよい’は年齢や学歴とほとんど関係がなく、(22) 60歳以上75%、‘みないがよい’、最高が大学卒18%に高校生は近く、20歳台前半のとも大きく異なっておる。生徒の意見は‘めんどろ

をみる課長がよい」とする多数意見⁽²³⁾や典型的日本人らしい意見⁽²⁴⁾と少し異なっておるといえる。

この「めんどろをみる課長」については西洋人とは大いに考えが違うのではなからうか。そして「めんどろは仕事以外みない課長がよい」という個人主義的意見⁽²⁵⁾に大学卒が多く、生徒も成人より多いことは個人主義的意見が大学や高校卒の成人より多いといえよう。ここには上役、目上の人、めんどろを見る課長に対する時、西洋人程の権利、義務の意識に欠け、上の人に依存して自己をあまり主張しきれない弱さと甘えの気持、また公私混同も理論的に割りきらず曖昧な情緒的態度と合理的な個人主義的態度が入り込んでいんでいると思われる。だからこの点いかに理論的理解にもたらし、日本人の自覚として、西洋的な個人の自由、権利の尊重といった新しい徳目と、できるだけ人に好意をいただき「めんどろ」をみるといった旧い徳目を共存に落着かせうるか、田舎に住みえず都会に出てはきびしい孤独感に悩まされる日本人の予想と行動、現実と理想との間の迷い、動揺をいかにして解消しうるか、そこに職場や組合内の民主的なあり方と関連する問題、人間疎外解消の問題が残されていると思う。そして高校生もその混乱と迷いの中を生きぬかねばならぬことと思う。

§ 6 男・女の差別

§ 6. 1 男・女の生まれかわり

男生徒は「男に生まれてきてよかった」とするもの75%、「もう一度生まれかわるとしても男とするもの」86%と多い。これは成人(1953, 1958年)のいずれの場合の9割前後よりはやや少ない。そして女生徒は「男に生まれてきたい」、「男に生まれた方がよかった」が4割前後であり、これは成人女子と大差ない。しかし、この成人女子も第4次(1968年)調査では「来世も女に生まれてきたい」、「女に生まれてよかった」が48%、47%となり、「男に生まれてきたい」という希望より5%リードし、女生徒も「女に生まれてきたい」が50%と成人女子よりも更に多く希望している。

この点、アメリカやカナダの女性も「女に」というものが66, 68%もあり、日本の女もカナダやアメリカと同じように希望するようになったといわれる。⁽²⁶⁾

§ 6. 2 男・女の苦しさ楽しさ

これは、次の「苦勞どちらが多いか」、「楽しみはどちらが多いか」〔§ 6(2)C, D〕において、「男が苦勞が多い」は男60%、女47%がそうみて、「女が苦勞が多い」とするよりはるかに多い。しかし「楽しみも男に多い」と男66%、女60%がみている。(1968年)

§ 6. 3 能力差

また、「能力差」〔§ 6(5)〕も男女とも6, 7割が認

めておる。高校生も同様で大差ない。

ただし、生徒の場合男子は「男に苦勞」を余計感じて80%と成人の60%を上回り、それだけ「楽しみ」は成人を下回る。そして女生徒も苦勞は成人と異なり、(男子の方が多く34%、女子が多い40%、成人女子は女子が多い33%、男子が多い47%)⁽²⁷⁾女の方が多くとする。しかし女生徒は「楽しみも男子が多い」とするもの成人女子の60%に対し40%と少なくみる。この点男子生徒は鶴高生のみで進学準備で苦のみ多く、楽しみは先にはあれど今はなく、成人以上の深刻さを感じ、また、青山、緑丘の女子も進学準備で男と同様成人以上の苦勞を感じ、楽しみも男子は少なからうと思う結果成人より少なくなっているのと思う。

しかし、大体のところ苦しみも楽しみも男子の方が多くと男女とも思っているといえる。そこで日本や外国の調査でいくらかでも女子が「女に生まれてよかった。また女に生まれていたい」という意見がふえてきた原因は、男女ともに「男の方に苦勞が多い」と考え、「男の方が楽しみが多い」というものが少し減ってきていることからいえるのである。

§ 6. 4 「女は家庭か世間か」〔§ 6(3)〕

この問に対しては成人女子が「家庭を守れ」と78%がしているのに対し、女生徒では33%しかなく、「場合による」が成人女子11%に対し女生徒では61%と反発する。しかしながら積極的に「世間に出て働け」とするものは成人でも男が6%、女で4%しかない。生徒でも男・女とも4~6%程度である。だからこれは「場合によっては同権的に社会進出もすべきである」と反発したのであろう。この項に関しては、「本は家庭を守れ」と「場合による」とする男女の対立は成人にはあまり開きがないのに、生徒では「守れ」男66%対女33%、「場合による」も男30%、女61%と対立が大きい。

「女の世間の仕事にたずさわること」〔§ 6(3)b)〕

だから、それは「好ましくない」が成人男子の26%に対し、男生徒は54%と多く対立、女生徒は「出ることを好ましい」66%と成人の女子と同じく希望するのに対し、男生徒はわずか22%と、成人男子の61%の1/3しか支持しない。これは男子生徒は鶴見丘のみであるから、優秀な女生徒に対する反発、嫌悪、警戒からであろうか。また「全」の成人男子が女子の職場進出を願っているのと環境の違いによるのであろうか。男女別ありと本質的平等が男・女差別をいかに解消させるか、女性上位的とかいわれる現代での男女の望ましい分業のあり方の問題があると思う。

なお、この男女別の項に関しては性別による差、対立を除いてあまり大きい差はないようである。⁽²⁸⁾

§ 7 一般の社会的問題

ここに属する問題は、文明と人間性、国家と個人、法律に対する考え方、仕事の価値に関する考え方等である。

1) 文明と人間性

これに属するものは3問ある。'人間らしさはへるか'、'心の豊かさはへらないか'、'21世紀の世の中' [(1), (2). b] の問である。これに関しては、§ 2 個人的態度、§ 3 宗教についての分析及比較の際、'性善・性悪'、'宗教か科学か'、'あの世を信ずるか'、'過去と将来'等と関連させて将来の社会不安に対する心の問題として扱ったので、(1) ここでは省くことにする。要約すれば、生徒の半数は'いちがいにはいえない'と慎重に保留するが、残りの半数以上に'人間らしさ'も'心の豊かさ'もへると悲観的で、前後の項目にわたって一貫していた。成人には迷いがみられ、肯定・否定の幅が大きく揺れ動いていた。といえよう。

2) 国家と個人

1. 家族・国家中心か個人中心か

これには3つの問題があげられる。すなわち'家族・国家中心か' [§ 7(3)] の問に対し、'家族・国家とするもの'が50%、'個人中心とするもの'が37%の成人に対し、生徒は前者わずかに13%、後者68%と逆になっておる。

この点「全」に年齢別、学歴別グラフが出てないので比較ができないが、青少年一般の自己中心的、自己主張的態度といえよう。

2. 日本と個人の幸福 [§ 7(4)]

ここでも「全」の成人では'個人が幸福になってはじめて日本全体がよくなる'とするもの28%、'日本がよくなってはじめて個人がよくなる'とするもの32%と、両者の考えを支持する率はほぼ同じであるのに、生徒では個人優先40%、日本13%と成人に比し個人優先がずっと多く、また両者の開きは成人よりも大きい。

しかし、成人でも生徒でも約3割はいずれも'日本がよくなることも、個人が幸福になることも同じである'と答え、良識を示し安定している。しかし、生徒の4割が個人優先の考えを示すのは、前述の'くらし方'でも'趣味に合った楽しくくらす'考えがふえつつある傾向と対応するものであろう。

なお、これを年齢別、学歴別にみると'個人優先'の考えは20歳台前半が35%と最高であるが、それより多く、また、大学卒41%と最高に近い。しかし成人では'個人優先'よりも'日本=個人'がいつでも多いこと、'個人優先'は若年層ほど多いことが指摘される。(2) 個人主義的意見にみられる傾向といえよう。

3. 公益と個人の権利の関係 [§ 7(5)]

ここでも'公の利益のため個人の権利が軽んぜられていることが多い'から、'公の利益が多少犠牲になることがあってもしかたがない'とする生徒は、成人の38% (軽んぜられている) 従って'公の犠牲もやむをえない' 33%を上回り、50%も軽んぜられておるとし、'やむをえない' 41%と、自由解放、自己主張、そして社会に対する反発と関連する。この点「全」では、個人の権利尊重33%、公益重視57%で、公益重視の傾向が強く、年齢別にもはっきりした傾向を示しておる。個人の権利尊重は若いほど多い。一方、公益尊重は若い方にやや少なめである。学歴別では'公益重視'が高学歴になるにつれて多くなり、年齢別の動きとくらべ注意を要しよう。一般に、年齢の若い方に支持されている意見は学歴の高い方にも多い意見ということになっているが、この場合は逆であってめずらしい場合である。一方、'個人の権利尊重'は学歴に関係はないとみられる。とのべておる。(3) '公益重視'は57%、20歳台前半でも50%あるのに、生徒22%とはあまりにも低すぎるのであるが、青年期の特徴が著しく出ているというだけですまされないところである。「しきたり」「家」「恩」「社会・国家・生活」といった社会的なるもの、社会との関連、倫社の'現代社会と人間関係' 政経の諸項目がも少し重視して扱われねばならないものと思う。大学受験のため政経や倫社科目が敬遠され軽視されたりすることが、大学に進学して、よく教えられなかったことから大学紛争や留年になるとしたら大変である。文部省のいう政治的教養の尊重、生徒の政治的活動についての充分な指導を大いに工夫すべきものであろう。

3) 法律に対する考え

これは'法律は金持に有利か' '法律の精神' [§ 7(13). C] ではっきりさせようとする。成人では'法律は金持に有利である' 56%と過半数が答える。しかし、'法律は世の中に正義が行なわれるようにつくるべきである'と願うもの、また56%と、現実認識では法律の階級性らしきものを肯定するが、生徒では'金持に有利' 40%、'そうは思わない' 36% (成人27%) と大人のように階級の見方は少ない様である。そして'正義が行なわれるようにつくるべきである'と成人とほとんど同じ53%が期待する。すなわち「法律の精神」においては成人とほとんど変わらない比率である。ただ'金持に有利か'という点大人と相違している。この法律の階級性如何は問題であり、生徒にはそれほど実感として感じられないことであろうし、また学校でもあまり詳しく掘りさげて扱うには、政経2単位では困難であろう。

なお、この'法律の精神'については「全」では次の

様に指摘している。すなわち前は「法律はおたがいに、ぐあいよく生活できるように、つくるべきである」とするもの46%「正義が行なわれるように」が45%とほぼ同一であったのが、後には「正義が」56%「ぐあいよく」が37%と差がでてきた。そして、「いわれる古いと主観的に予想される意見がふえてきたのは注意すべきところである、(4)と。そして生徒が「正義が行なわれるように」が53%は「全」での20歳台前半61%、後半68%（最高）大学卒67%より低く、40歳台後半、中学卒並であり、正義感に乏しいというより、理解不十分といえそうである。しかし、悲観的、自己中心的といわれる生徒も大人と同じように法の権威に期待しているといえよう。

§ 8 政治、権威に対する態度

1) 権威主義

ここでは「政治家にまかせるか」(1)で、日本の国をよくするためには、すぐれた政治家が出てきたら、国民がたがいに議論をたたかわせるよりは、その人にまかせる方がよい、という意見に対して、「まかせる」が成人の30%に対し、生徒ではわずかに4%しかなく、そして「時と人による」が成人の10%に対し30%近くもあり、それに「まかせない(反対)」の55%(成人51%)と合わせると、きわめて批判的抵抗的である。しかし成人の場合15年間に賛成論(まかせる)が4割余りから3割へとへり、逆に反対がふえている(5)から、「この質問を通してみるかぎり、日本人は権威主義的傾向から遠ざかり、民主主義的傾向に向かっているということが出来る」(6)と「全」でのべているが、生徒もその意味の批判的、健全な態度といえよう。しかし、これも20歳台前半の「まかせない」64%にくらべるとやや低い。しかし高校卒59%に近い。(7)

しかし、生徒の批判的、抵抗的態度もそれならば具体的に社会や経済のあり方について内容を次の諸主義に分けてきてみると、その批判的もはっきりした積極性に欠けているようである。

2) 政治、経済上の諸主義

たとえば「民主主義」「資本主義」「自由主義」「社会主義」〔§ 8(2)〕について、「民主主義」は「よい感じ」の問に対し、成人は55%が「よい感じ」とするの、生徒はそれ以上に下回る50%、半分しかよく感じていないし、しかも、それは「時と場合による」が成人の12%に対し34%と3倍近くにもなり、「民主主義」にも批判的というより懐疑的とさえみえる。しかし、「自由主義」はその名の示す如く、「よい感じ」とするもの成人の35%に対し、倍近くの60%がよいとし、「よくない感じ」は逆に成人の31%に対して5%しかない。

これは前述の「個人本位」「自由か規律か」に対する

態度と通ずるものである。「民主主義」については成人の20歳台前半が「よい」〔(2), e〕とするもの46%に比し40%と、感じだけでなく実際も少なく、大学卒61%に比し大きく下回り(8)懐疑的であるといえる。「自由主義」については集計グラフが出てないので比較できない。

ただ、この「よい感じ」の調査は1958年(第2次)のであり、第3次、4次の「よいか」の調査では「民主主義」も「自由主義」も「よい」とするものは38、24%とへっており、生徒の「民主主義はよい」40%に接近しておる。しかし、「民主主義も時と場合によってはよくない」という意見が半分前後の国民の意見なのであり、むしろ時と場合によっては、民主主義の名のもとに、非民主的なことがおこなわれていることがある、と考えるものが多い、と解釈すべきかもしれない。いずれにしろ、日本の社会で、民主主義が完全に一辺倒的な支持を得ていたり、あるいは日本の社会が完全に民主的に運営されている、と考えられているわけにはいかない。(9)と「全」でのべている如く、生徒もよりきびしく考えているものといえよう。この点民主主義について20歳台前半46%のように甘くないし、大学卒が「よい」61%も理念としてであって現実をいっているのではないと思われる。(10)

ただ、ここでは「自由主義」について成人では「よい感じ」(1958年)35%が、その後の調査で「よい」24、29%とさがっているのに、生徒は「よい感じ60%と高いところに問題があると思う。生徒は「自由主義」と「民主主義」をどのように理解しているのであろうか。ここでは「自由主義」が思想として、理念として「よい感じ」と素朴な自由への憧れを示しているものと思われる。しかし「よいか」(本調査ではどうしてか洩れた)となると、これも「民主主義」以上に実体がかみかず、成人と同様少しへるものと思われる。しかし「全」でも民主主義と自由主義はどの年齢でも支持するものの方が、否定するものより多い。(11)生徒でも同様で今後とも逆転することはなからうと思われるけれども、この項目は民主教育とはなにかの本質にかかわるものとして、その指導には一層の配慮が必要とされるものであると思う。

「資本主義」「社会主義」〔§ 8(2)b. d. f. h)〕

そこで、それならば生徒は上の主義についてどう思うかとなると、成人比「よい感じ」の場合でも「時と場合による」が、資本主義9%に対し53%、社会主義10%に対し44%、「よい」場合でも資本主義42%に対し80%、社会主義46%に対し76%と、倍又はそれ以上に多く慎重、保留となり、資本主義、社会主義「よい感じ」、「よい」

は皆20%以下となっておる。だからこの「資本主義」「社会主義」については、成人の20歳台が社会主義支持がいくらか多いといっても23%から16%位である。(12)以上に、生徒もはっきり断定するのはなお少ないのである。国民一般も迷っているが、生徒はなお更である。だから若い人が革新的であると断定しにくく、かえって保守政党支持がふえているともいわれるのは、やはり政党の国民への呼びかけも不十分であり、学校でも文部省が力説するにもかかわらず、公正な判断を下しうるまでには政治的教養も政治教育も進んでいないことを示しているものといえよう。これまた重大痛心事である。

3) 選挙と支持政党

「選挙への関心」〔§ 8(6)〕も‘なにをおいても投票する’は、成人の51%に対し26%であり、‘あまり投票する気になれない’が成人の4%に対し10%となる。昨今の政治に対する不信が批判的、懐疑的、悲観的と相まって、消極的、無関心、無気力を拍車づけそうである。

なお、10年間3回の調査では、若い人の投票意欲が低く、実際の投票記録からも低い。しかし、これはまた西ヨーロッパ諸国においてもみられる現象である(13)という。

「支持政党」〔§ 8(7)〕

ここでも‘なし’が成人2割前後(15年間を通じて)の倍43%となる。約半数は支持の判断に苦しむか、いずれも差はないとみているのであろうか。また‘わからない’(D・K)も成人の6%に対し30%にもなる。かかる傾向がもし全国的にあるとしたら大変である。社会科教育(特に政経)また一般の政治教育に大きい責任が課せられるものとなろう。

‘1950年代のアメリカの青少年は、おとなしく社会について無関心すぎるといわれた。その間に、国の内外の問題が深刻化し、60年代のアメリカの青少年は一変した。無関心から対決と造反へ。日本は、アメリカとは違う道を歩むかもしれない。いずれにせよ、青少年の意識を軽率にわり切ってみるべきではない。感受性の強い世代の意識は未来を予知するアンテナだからである。(14)という警告に耳を傾くべきであろう。そしてまた「朝日新聞の私の教科書批判」(15)にもある如く‘教師にたっぷり時間を、なぜ各政党に触れぬ’、に耳を傾け工夫すべきであろう。「全」の調査でも「復古調というような傾向もみられない。しかし民主主義が完全に定着したともいえないし、政治的に革新主義が伸びたということではできない。逆に非民主的な傾向が増大したとか保守化したというわけにもいかない」(16)というのが戦後27年たった現在の日本であろう。そして、このようになにごとにも徹底しえずさまざまな要素を適当かどうかしらないが

まじり合って、あまり理論的に黑白をはっきりさせず、またしようともしない、現実、与えられた事実に対して理論的に弱い重層的精神構造が日本人の国民性として、私達の身体の中にくい込んでいるといえるのではなからうか。それ故にかかる国民性をいかに解明すべきか、その治療法如何がわれわれ日本民族の将来を左右してゆくものであると思う。

§ 9. 日本人・人種

1) 日本人の長所・短所

ここでは自らの長所、短所をどのように見るか、これは倫社における民族、国家の項に関連し、更に国民性をどう見ると関連する。

長所としては‘勤勉、ねばり強い、礼儀正しい’が「全」の成人と同様多くあげられているが、特に‘勤勉’のみは成人よりも多くあげられている。そして‘ねばり強い’‘礼儀正しい’は成人よりも少ない。また成人でそれらについて多い‘親切’‘淡泊’は高校生ではずっと少ない。

また、短所として成人があげている多いものから順にのべると、‘気が短い、熱しやすくさめやすい、島国的、模倣的、しゅう念深い’等になるが、生徒ではそれらより外に‘ずるい’が最も多く、模倣的、島国的、しゅう念深い、けちん坊’の順となり、しかもそれらは成人よりどれも多くあげている。長所としてあげているが多いのは‘勤勉、合理的、理想を求める’のみであり、また、短所としては成人よりも皆多い、という風に評価がきびしい。

この項目では長・短いずれにせよ年齢よりも学歴の違いによる影響が大きく、それが年齢的にも反映しているようで、高学歴層ほど長所では‘淡泊’短所では‘熱しやすくさめやすい’、‘島国的’‘模倣的’などのような、以前から日本人の性質としてよくとりあげられてきた項目をあげる割合が高く、学歴の低い層とくらべてかなりの開きを示しているのは注目される。(17)そして‘勤勉’については高校生96%、大学卒90%とともに最も高く一致しておる。エリートたらんとする心組の現われともいえよう。次に‘ねばり強い’は生徒の53%に対し、中学、高校卒が61%と、ちょっと高い。‘淡泊’も成人13%、生徒10%であるが、これは大学卒のみ33%と大きく見解を異にしている。しかしそれ以外は年齢、学歴別には目立った開きは少ないようである。

短所としても、生徒の最も多くあげる‘ずるい’73%は成人では20%前後で、年齢、学歴による差は小さいし、次の‘島国的’66%は大学卒の75%につぎ、(18)‘模倣的’55%も成人27%以上だが大学卒67%とそれに近い。‘熱しやすくさめやすい’48%は成人47%の平均と

同じ、次の‘しゅう念深い’54%は成人の26%の倍にもなり、成人ではこれも各層別に開きは少ない。

また、‘軽薄’も32%と成人の9%をはるかに上回り、生徒の‘ずるい’しゅう念深い、‘軽薄’とみるものは成人と大きく開きをみせている。ここには生徒の接触する狭い生徒仲間についての進学準備体制における競争意識から、広く日本人を見る余裕を欠いで判断から欠点のみを鋭く指摘する青年心理が働いているように見うけられる。しかしまた、社会経験は乏しいから狭い視野とはいえ、青年の純粋、潔癖、理想主義的傾向からみている面もまじっているものと思われる。自己にも他人にもきびしい評価である。日本人の‘くらし方’も変われば、日本人の長所、短所についての見方も学歴の差により変わってゆくものと考えられるし、生徒は大学卒のように世の中は分からず、旧いよきものも分からないという意味で、今後、新の意見がふえる予想はされてもどのように日本人の性格を見るかは予測出来ないと思う。

2) 「日本人、西洋人の残酷」〔§ 9. (5)〕

ここで‘どちらが残酷だと思いますか’という問に対しては、成人と同じく‘西洋人の方が残酷だ’(27%と29%)としているが、生徒では‘日本人、西洋人同じだ’とするものがそれよりもずっと多く39% (成人21%)である。そして‘日本人の方が残酷だ’とするのは15% (成人22%)である。なお、ここでは‘分からない’が成人で27%もあり、生徒も13%ある。もっともこの調査は1958年のみであるから1972年の生徒のそれとは時代の移りかわりもあろうが、しかし、その間西洋人が残酷なことをやった事件として判断に影響を与えるものとすれば、ベトナム戦争であろう。それが生徒の方が‘西洋人の方が’を29%と成人より2%多くしているのかもしれない。しかし第2次大戦前から戦時にかけての日本軍の中国侵略における暴行、犯罪的行為が報道されて‘日本人、西洋人同じ’39%と多くなっているのかと思われる。だから現在成人を調査してみると、また大分変わるのではなからうか。生徒は成人の如く西洋人を知らず、それだけに良い点も悪い点も知らぬといえるし、成人では戦前、戦中、戦後の経験からまた先入見、偏見も加わるものと考えられ、この項目のひとつでいえばといっても漠然とならざるをえないであろうと思われる。また、この項目については各層別のグラフがないので比較はできない。

3) 「日本人、西洋人の優劣」〔§ 9. (6)〕

だから優劣を問われると、成人では‘日本人がすぐれている’が半数近くあり、戦後の発展の実績に自信づけられ、また、再建した日本に対する愛情から多くなっているものと考えられる。これに対し、生徒では‘ひとく

ちでは云えない’が半数を占め、慎重か自信のなさを示し、成人の21%をはるかに上回っている。そして次に‘同じだ’が、成人の12%に対し約倍の22%となり、‘日本人の方がすぐれている’というのは、成人の47%に対し、わずかに18%である。しかし‘劣っている’とするものは6%と成人の11%より少ない。やはり日本人がすぐれているとすることには、成人、高校生とも変わりはない。なお、‘すぐれている’とする者の各層別の差は少ないけれども、大学卒が最も高いこと、また女子の方が少ないことはいえる。(19) 生徒が大人程には‘すぐれている’とするものがずっと少ない(47対18)のは、やはりこれまでの日本人の国民性の一つである「外国崇拜」が「全」の調査にみられる限りでは成人には解消しつつあるようにみえるが、生徒には‘西洋人の方が残酷’と多くみても、おな、‘西洋人の方が日本人より’とみる風が相当残っているものといえそうである。この点大学卒とは相当違いがみられる。

4) 「すぐれた人種」〔§ 9(7)〕

ここでも成人では日本人59%、ドイツ人45%、アメリカ人43%、そしてイギリス人21%、フランス人13%、ロシア人12%の順になっている。生徒では調査の不便でドイツ人の記入洩れがあり不完全であるが、日本人20%、ユダヤ人15%、中国人12%、アメリカ人11%、イギリス人10% (ではない)となり、日本人が多分最上位になると思われ、その点成人と変わりはない。ただ生徒の場合‘優劣なし’が成人の7%に対し41 (130人で0をつけた数ゆえ) 30%となる。また‘分からない’も15% (成人17%)あり、自信のなさがうかがわれる。「全」での大学卒と比較してみると〔()内は成人平均〕日本人70% (平均59%、1968年) ドイツ人69% (45%) 次にイギリス人28% (21%)、そして中国人22% (9%)、ユダヤ人18% (8%)と生徒のユダヤ人、中国人に対する評価と似ておる。ドイツ人も相当高く評価したのではないかと思われる。しかし生徒に‘優劣なし’が相当多いところに認識不足か教育不足かと思わせるものがあるといえよう。

5) 「すぐれた国」〔§ 9(11)〕

ここでは「科学技術」「芸術」「教育の程度」「経済力」「生活水準」それぞれでどの国が一番すぐれているかと問うのであるが、日本は「教育程度」では他の国よりすぐれているというものが多いが、「科学技術」では米ソ独に次ぐ第4位、「芸術」ではフランスにつぐ第2位、「経済力」「生活水準」ではアメリカ以外は日本も含めて、どの国も同程度と考えられている。(20) また、‘すぐれた国’としてあげられた数を示すと、アメリカ、ソ連、日本、イギリスが多くえらばれているとして

いるが、⁽²¹⁾ 生徒も「科学技術」「教育程度」の点成人と同じであるが、「経済力」ではソ連を凌ぎ第2位であるとし、生活水準ではアメリカ、これにつぐものとしてスウェーデンを高く評価（成人4%にすぎぬに対し30%）、次にイギリス（成人3%に対し8%、2番目に高い国としては22%があげトップになる）そして、日本としている。「芸術」については「一番すぐれている国」は成人と同じくフランスとするが、その次には成人は日本をあげているが、生徒はドイツ、イタリアをあげ、日本はその次としている。かく日本の評価は成人と大きく異なり、低く、ドイツ、イタリアは成人よりもはるかに高く、ドイツ1%に対し18%、イタリア4%に対し18%という具合である。なおイタリアは1位と2位の%を加えた成人の%は18%で日本と同じとなる⁽²²⁾ところ、生徒の評価も狂ってはいないといえる。「生活水準」でも成人とあまり変わりはない。ただフランス、スイスを日本の上におくかおかないかの違いである。

この「日本人と西洋人」の項目も前の日本人・人種の場合と同じく学歴別に差のあるものが多く、学歴が他の属性よりも優先して深い関係を示している⁽²³⁾と「全」でまとめておるが、各人の知識量に関係するところ大きく難かしいことである。しかし大体のところ高校生の方がよく的を射ているのではなからうかと思える。

6) 「日本の立場」〔§9(9)〕

終りに、「日本はいかなる立場をとるべきか」という問に対して、「世界平和のためには、どんな問題にも積極的に発言すべきだ」とするもの成人の53%に対し生徒では75%も支持し、次には「極東やアジアの先進国として、この地域の問題については積極的に発言すべきだ」が成人の8%に対し20%と上回っておる。そして成人では「世界平和のための発言はよい」としても「極東・アジア地域についての発言は避けるがよい、と思うからか、「どんな国際紛争にもまきこまれないように発言に注意すべきだ」14%と「アジアについての発言」8%と順が入れかわっている。

こには高校生としてのひたむきな積極的な姿勢がうかがわれる。成人は国際情勢を知る故にか幾分慎重である。これに対し、身近な社会、自国の将来に関しては、その中にあり、敏感にとらえ「先が見えすいておる」として自己を守り、自由、権利の尊重を社会に向かって叫ぶ生徒、また、社会からの圧迫感を抱き、自己中心的、批判的、拒否的、悲観的にも見える生徒も、「自由主義」を讃え、「世界平和」「極東アジアの建設」といったやや抽象的ではあるが一般的、広い問題に対しては、なお意欲的であるといつてよく、ここに、彼等によく社会、国際情勢、国内政治について明確な理解を持たしむ

べく、民主教育、政治教育、国際理解、協調の教育を施すことによって、生徒に明かるい希望を抱かせることにより、教師も国民教育の一環を父兄、生徒と共にない進むべきではなからうかと痛感する。

あ と が き

以上、倫社研究大会での発表に基き、その時のプリント3枚での不十分なものを更にまえがきに記した本を参照しつつ補い、少し詳細に分析、比較、考察してみた。これによって調査事項のほとんど大切なところには触れることができたと思う。叙述も「全」と記した本の取扱いにほとんど準拠し、「見出し」も「全」の本を参照される都合から、本の見出しによってのべてきた。ただ初に断わった如くこの調査対象人員が極めて限られた地区、人数であることから「らしい」「かと思われる」式の記述が多かったことである。

なお、ここでこの調査を事前了承もえずに借用したことを統計数理研究所国民性調査委員会に紙上からお許しを乞うと共に今後の広範囲の調査のために少しでも参考になりうるならばと願う次第である。

また「国民性の考察」の上で勉強できたことを委員会に感謝する次第である。なお、紙面の都合で別に「日本人の国民性」調査の質問文と単純集計表で「全」と生徒の%だけでものせるべきと思っていたが、文中質問文を記し、また比較の意味で%の数字も出しておいたので省略することにした。 1973.3.7 (短大卒業式前夜)

〔註〕

I 個人的態度

- (1) 至誠堂発行昭45, 569頁, 同じく前回の調査を「日本人の国民性」の名で発行, 同所国民性調査委員会編
- (2) 「全」P320
- (3) 「全」P33
- (4) 「全」P187
- (5) 「全」P208
- (6) 「全」P212
- (7) 「全」P217
- (8) 「全」P186
- (9) 「全」P249
- (10) 「全」P224
- (11) 「全」P424
- (12) 「全」P36
- (13) 「全」P37
- (14) 「全」P224

青少年の連帯感などに関する調査(46.5.8朝日掲載)でも「日本の理想像」として「生活が不安なくすごせる国家として」が全国15歳~24歳までの青少年10万人を対象39%

「日本人の国民性」調査にみられる高校生の動向

で、トップにあることもこれを表わすものといえよう。

- (15) 「全」 P 226
- (16) 「全」 P 337
- (17) 「全」 P 339
- (18) 「全」 P 189
- (19) 「全」 P 220
- (20) 昭和15年に20歳だった人は昭和38年には43歳で、昭和6年検査の人は50歳に達している。その人たちの意見。
- (21) 至誠堂、図説日本人の国民性、P172~3、しかし、東京証券取引所第一部上場会社から無作為に選んだ50社500人の20代の男性に対しなした「新しいサラリーマン像をさぐる」(昭45(1970).3.26朝日新聞)においては、共感できる人物像、として‘よきパパ・よき夫’が1位75、次に‘出世せずとも清く正しく’が67あり、また‘社会活動に生きる’57と、割に古いとされる日本的考え方も相当残っているようである。

- (22) 「全」 P 427
- (23) 「全」 P 50
- (24) 「全」 P 207
- (25) 「全」 P 206
- (26) 「全」 P 362
- (27) 「全」 P 428
- (28) 「全」 P 428
- (29) 「全」 P 223
- (30) 「全」 P 185, 187
- (31) 「全」 P 53~54
- (32) 「全」 P 55~56
- (33) 「全」 P 14
- (35) 「全」 P 185
- (36) 「全」 P 222~3
- (37) 「全」 P 380
- (38) 「全」 P 438, P 279
- (39) 「全」 P 62
- (40) 「全」 P 250

II 社会的態度 § 4. 子供・家

- (1) 「全」 P 184~5
- (2) 「全」 P 208~9
- (3) 「全」 P 211
- (4) 「全」 P 69
- (5) 「全」 P 185
- (6) 「全」 P 429
- (7) 「全」 P 66, P 251
- (8) 「全」 P 208
- (9) 「全」 P 224
- (10) 昭46.5.4 大分合同新聞、県婦人児童課「県内青少年の意識の特徴」記事
- (11) 昭45.11.15 朝日新聞「世界の若者はなにを考える一意識調査」
- 昭44. 1.15 西日本新聞「若者への10の質問から」

- (12) 「全」 P 188
 - (13) 「全」 P 187
 - (14) 「全」 P 430
 - (15) 「全」 P 218
 - (16) 「全」 P 219
 - (17) 「全」 P 187
 - (18) 「全」 P 72, P 186
 - (19) 「全」 P 223
 - (20) 「全」 P 73
- なお‘つがせる’という人は年々へっておるとのことである。(「全」P194)

§ 5. 身近な社会, § 6. 男・女の差別

- (1) 「全」 P 77~78
- (2) 「全」 P 77~78
- (3) 「全」 P 217
- (4) 「全」 P 253
- (5) 「全」 P 226
- (6) 「全」 P 249
- (7) 「全」 P 207
- (8) 「全」 P 208
- (9) 「全」 P 433
- (10) 「全」 P 210
- (11) 「全」 P 208
- (12) 「全」 P 371
- (13) 「全」 P 186
- (14) 「全」 P 187
- (15) 「全」 P 433~4, P 249, P 252~3
- (16) 「全」 P 433
- (17) 「全」 P 339
- (18) 「全」 P 339
- (19) 「全」 P 189
- (20) 「全」 P 218
- (21) 「全」 P 12
- (22) 「全」 P 435
- (23) 「全」 P 185
- (24) 「全」 P 208
- (25) 「全」 P 218
- (26) 「全」 P 13~14
- (27) 「全」 P 377
- (28) 「全」 P 437

§ 7. 一般の社会的問題, § 8. 政治、権威に対する態度,

§ 9. 日本人、人種

- (1) P 22~24
- (2) 「全」 P 440
- (3) 「全」 P 132, P 440
- (4) 「全」 P 133
- (5) 「全」 P 386
- (6) 「全」 P 146
- (7) 「全」 P 442

桃 田 信 吾

- (8) 「全」 P443
(9) 「全」 P143
(10) 「全」 (8)による
(11) 「全」 P443~4
(12) 「全」 P443~4
(13) 「全」 P139
(14) 昭46.5.7 朝日新聞社説
(15) 昭47.3.29 社会 (佐藤藤三郎)
(16) 「全」 P149
なお、今年4月実施の世論調査では、支持政党なし25.5
- ％ (学生は40%でトップ)、4人に1人は脱政党、政治不信組大幅に増える、と報じている (48.5.3 大分合同) また、生徒の43%は学生なみである。
- (17) 「全」 P250~1, P447~450
(18) 成人40%前後 P450
(19) 「全」 P451
(20) 「全」 P398
(21) 「全」 P171~2
(22) 「全」 P168
(23) 「全」 P250